

過去を清算した瞬間 ～明治維新 150 年に思う～

長尾 建樹

東邦大学医療センター佐倉病院病院長

東邦大学医療センター佐倉病院脳神経外科教授

日本国民にとって明治維新と第二次世界大戦終結は、それまで形成されてきた社会体制や価値観、育んできた文化までもが大きく変えられた瞬間だったと思う。諸外国を見ると新しい時代を迎える前に大変な殺戮が繰り返されていた。他のアジア、中近東、ヨーロッパ諸国では君主が倒され新しい国ができる歴史を繰り返していたが、日本は神代の昔から天皇を頂点とした国体が維持されており安定した文化を育んでいたように思う。ところが、この二つの出来事はそれまでにない大きなインパクトで日本を変貌させた。日本の中世における天皇制から武家社会の変化はそれまでの文化伝統を継承していたように思うが、明治維新で一気に過去を清算し、第二次世界大戦後には初めて国民主権の新生日本となっている。古い体制を破壊して新体制を創造した方が効率は良かったと言えるし、実際に破壊後の新国家建設で発展につながっている国もある。古い体制を維持したままでは効率よく改革を行うのは難しく、この点で明治維新は倒幕により改革の効率を高めたと言えるが、日本創造以来絶えることなく続いている天皇という独特な存在が日本国消失を回避させたと思う。ただ列強と肩を並べるために急速な欧米化を推進したことが日本の伝統や精神の大きなターニングポイントとなり、日本人が固有のアイデンティティを見失った瞬間ではないだろうか。さらに第二次大戦で日本は外圧により再度精神のターニングポイントを迎え大きなリバウンドとして日本国に対する帰属意識が希薄になったのではないだろうか。

東邦大学の歴史を顧みると、昭和 30 年代初頭に女子校から男女共学校へ移行したことが卒業生たちに大きなインパクトを与え同窓会組織が大きく変貌している。私事で申し訳ないが母は帝国女子医専を卒業し同窓会である鶴風会会員として母校と学祖をこよなく愛し誇りに思っていた。母校、すなわち東邦大学は世界で一番素晴らしくかつ優秀

な大学であると確信していた。私は東邦大学入学後に同窓会が鶴風会から東邦会に変わっていることを知り、また、卒業してから他大学の医師と仕事をするようになり母校に対する思いが他大学より低いと感じることが多々あった。そのたびに母の強烈的な母校愛を思い出し鶴風会の持っている強い帰属意識と誇りが継承されていないことを感じていた。共学となった後の卒業生が新生の大学を創造し新たな気持ちで東邦会を立ち上げていく過程には殺戮のようなことはないまでも多少の争いが生じていたであろう。まさに明治維新と重なり開学以来の伝統と精神のターニングポイントであったと思う。

私が学生生活を謳歌した 1970 年代は日本の貧困の消滅とともに三無主義（無気力、無関心、無責任、これに無感動を加えて四無主義とも言われた）が若者の中心的思想であり日本に対する愛国心、母校に対する誇りなどを持つことに大きな違和感を感じていた。しかしながら社会に出て多くの人たちと接触するうちに自分のアイデンティティの確保の重要性を感じるようになり、特に海外留学中は日本の良さを思い起こす機会が多く、誇れる国であることに気付かされた。最近のグローバル化した社会においては身近に客観的な日本を知ることができ、若者たちは日本人としての誇りを持っていてと感じている。

翻って母校を思う時、大学はアイデンティティを高める努力を続けており、教職員も各分野で成果を上げ一丸となって誇りを持てる大学作りに励んでいる。同窓会も母のような先達が築きあげた伝統と精神を受け継ぎ新しい形の東邦会として進化していると思う。

日本国そして東邦大学に帰属する者として、そこを発展させる努力がアイデンティティを高めより一層愛着を持つことができるのではないだろうか。

胸を張って心から国歌を歌える国になってきた日本のよ

うに東邦大学も体制の改革後 50 年以上を経て強い帰属意識で結ばれた一流大学としての誇りが芽生えてきていると実感できるようになった。この流れを止めることなく成長

させ後進へ継承していく責任を明治維新 150 年に思う。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2019-039